

「未来の担い手を育てるために今できること～地域が行う子どもの体験活動～」

邑南町 日貫公民館

1 日貫地区の概要

(1)日貫地区は、邑南町石見地域の中心部から西方向 11 キロへ位置し、17 集落 210 世帯からなる農山村地域で、高齢化率は 48.20%の地域です。

当地区は豊かな自然環境に加え大元神楽など伝統芸能や行事、歴史的な財産である町指定文化財になっている旧山崎邸があり、それを支えて受け継がれてきた「ひとのぬくもりいっぱい」の人柄、風土が根付いている。

(2)日貫地区には、保育所と小学校があり、近年児童数は減少傾向にある。しかし少人数であるものの、地域との繋がりが深く、地域住民と児童の交流の場はたくさんある。また、近年は日貫地区で伝統的な文化である、六調子大元神楽を伝える取り組みもさかんに行われており、小学校の毎年恒例行事である学習発表会での発表の 1 つに六調子大元神楽の発表の時間が設けられており、発表に向けて地域住民が先生役となって生徒に神楽を教える取り組みがされている。

(3)旧山崎邸（隅屋）は歴史的な建造物として、町指定文化財にもなっている古民家で、観光名所となっている。近年は旧山崎邸（隅屋）を活用した取り組みも行われており、春は長浜人形の展示会や、秋には六調子大元神楽のイベント、また小学生の囲炉裏体験などが実施されている。

(4)日貫地区に伝わる伝統的な文化として六調子大元神楽がある。大元神楽は国の重要無形民俗文化財にも指定されているもので、日貫地区には 5 つの神楽団が存在し、秋のお祭りでは、夜から朝にかけて神社で神楽が奉納される。毎年 11 月には六調子大元神楽フェスティバルと題して、日貫公

民館の体育館へ特設舞殿を設置して、大元神楽を披露し、地区内外から見物客が訪れている。

2 事業の趣旨

(1)日貫地区の問題の一つになっている人口減少や少子化がこのまま続き、地域から保育所、小学校が無くなると人口減少が一層進むことは明らかであり、定住人口を維持していくには、保育所・小学校の存続が必要で、対策を講じる必要がある。現在、高校・大学を卒業した日貫地区出身者の殆どは日貫地区へ戻らず地区外へ移住するのが現状である中、日貫地区では空き家活用対策等で U・I ターン者を呼び込むなど取り組みを進めている。そのような中で、この日貫地区出身者あるいは現在の子供達が将来的に U ターンをし、日貫地区の文化・歴史を子供達自らが先人から教わって、次は自分達を中心となって後世に伝えていくという循環型の地域を住民自らが主体となって進めていくための人づくり、あるいは仕組みづくりが必要である。日貫地区の豊かな自然環境と地域による支援体制を充実させ、住民が先生役となり文化を伝えることで自らが育ったふるさとへ愛郷心を生み、将来はこの地区へ帰ってきて生まれ育った地域を大切に、次の世代へ受け継いでいく子供達を育てる。そのために地域の既存の組織が中心となって地域の魅力を体験できる活動を実施していく。

3 具体的な取組内容

日貫地区で昔から行われている暮らし、また豊かな自然環境や伝統文化を生かした農業体験をテーマに「お米づくり体験」と

「そばの実づくり体験」を実施した。小規模の良さを一層生かすため、少人数だからこそ子ども達ひとりひとりが地域と深く関わることができるよう体験内容の充実を図った。

(1)お米づくり体験

9月中旬に「稲刈り・はで干し体験」として、鎌を使って手作業で稲刈りを行い、稲を束ねて、はでへ干す活動を行った。10月中旬に、はでへ干していた稲の「脱穀・もみすり体験」としてコンバインを使つての脱穀と、もみすり作業見学を行った。



(稲刈り体験の様子)

(2)そばの実づくり体験

8月下旬に耕作放棄地へ「そばの実まき体験」を行い、11月下旬に「そばの実収穫体験」として鎌を使って収穫し、12月下旬に収穫したそばの実を使った「そば打ち体験」を行った。



(そば打ち体験の様子)

4 評価と成果

(1)体験活動の重要性についての学び

体験活動を既存組織を中心に実施するにあたり、活動を行う前にワークショップ等の機会を設けてその中で子どもへの体験活動について学び、考える、また自分達の思いの共有化を行ったことで、この活動を行う必要性や重要性を感じることが出来た。また子ども達を地域で育てていく意識に変わるきっかけになった。

(2)体験活動を自分達で企画

活動内容を自分達で企画して実施することで、企画力が向上した。また企画を通して既存組織のメンバーひとりひとりが当事者の意識を持つことにつながった。

(3)参加した子ども達の変化

体験活動を通して、より地域に興味を持ち、より地域を知った。特にそばの実づくり体験はこれまで経験したことがある子どもが少なく、より興味を持って活動してもらえた。また自分達が次の担い手だという自覚が芽生えた。アンケートを見ると、体験活動後は家庭での手伝いが進んで出来るようになるなど、気持ちの面だけでなく実際の行動にも変化が見られた。

5 今後の課題と見通し

(1)既存組織の役割

既存組織が主体となって取り組むために活動の企画や当日の準備などに関わる方々が役割を持って行っていく必要がある。

(2)参加しない子どものための工夫

参加の少ない子ども、中にはまったく参加のない子どもがおり、もっと子ども達が参加しやすくなるための工夫が必要。

(3)学校との連携

ふるさと教育に力を入れて取り組んでいる学校と地域が連携した取り組みが必要。

(文責：職名 主事 氏名 橋本 尚也)